ビブリア No. 32
福島高専 図書館報
発行 いわき市平上荒川字長尾30 福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和53年12月11日

その道を 教科書だけでは駄目 究めるためには

いつまでも気にかかる二つの本

数学科 山野和一

いまではもうかなり下火になったようであるが，二，三年前には「怨霊」とか「鎮魂」とかが流行語になったことがある。民族学的な下地は以前からあったのであろうが，その直接的な火付け役は，梅原 猛の二つの本，

『隠された十字架 —法隆寺論—』

『水底の歌 —柿本人麿論—』

であったようである。私はこの本の存在を，現在国語科においでになる中村先生から教えていただいた。昭和49年9月，新任教官研究協議会というのが，人材開発センターという所で開かれた時，偶然にも，当時は高松高専におられた中村先生と相部屋になったのである。昼間の難しい講演などは，もうすべて過去のものとなってしまったが，夜，室にひきとってからうかがう「紀・記」「万葉」のお話は，門外漢の私にとって新鮮であった。「数学の方では何か面白い話はないですか。」と逆に質問された時，「ンーん」とうなるだけで返事が出来なかった事などを今でも思い出すことがある。当時は，無論，後に中村先生が本校においでになるなんてことは想像もできなかったので，「数学のおもしろい話」はそれっきりになってしまったが，もし再度同じ質問を受けたら，今度はたっぷりと話をさせていただきたいと思っている。

さて，梅原 猛の法隆寺＝聖徳太子の怨霊封じ寺，柿本人麿論＝石見配流，刑死説は次のようなものである。

◎前提：人が神としてまつられるのは，生前高い地位にあったその人が，何らかの怨念を残して死んだ場合が多い。後の人はその祟りを鎮めるため，神としてまつるのである。　例．出雲大社の大国主命，北野天神の菅原道真など。

この前提を法隆寺と聖徳太子にあてはめるとどうなるだろうか。太子は生れた時から聡明で人から慕われていたそうである。当然天皇になるはずであったが，その前に崩御された。それはまだよいとしても，太子の息子山背大兄は古人皇子と皇位を競う立場にあったため，蘇我氏によって斑鳩宮に於て一族が虐殺された。

太子の一族はここに断えてしまったのである。このことを太子の霊が怨まないことがあろうか。証拠はある。法隆寺資財帳によれば，皇室，藤原氏の危機天皇崩御，藤原四兄弟の相次ぐ死——には必ず法隆寺に多くの文物が施入されているという。これは太子の怨霊を鎮めるためではなかろうか。その外にも怨霊封じ込め寺としての証拠がいくつかあげられている。

『水底の歌』では万葉集と柿本人麿が，より複雑ではあるが，同一の論調で説かれる。

(1) 古今集仮名序（紀貫之）には柿本人麿は「おほきみつのくらゐ」（正三位），真名序（紀淑望）には「柿本大夫」（大夫は四位以上の職の長官）としているから人麿は高位にあった。また万葉集では天皇，皇太子の行幸に従駕して作歌しているから"名声赫々たる当代随一の詩人"であった。後世の伝承もそれを裏づけている。

(2) ところが，万葉集には「柿本朝臣人麿，石見の国に在りて臨死（みまからむ）とする時……」とあって「死」は六位以下の者に対して使われる表現―― 三位以上は「薨」，四・五位なら「卒」――であるから人麿は六位以下の地方官であった（賀茂真淵）。

(3) (1)と(2)は明らかな矛盾であるが，これを解決するのには―― 歌の解釈，伝承などを考えあわせて――，

(a)人麿は高官であったが，何かで罪を蒙り，官位を剥奪され，

(b)猿（「柿本佐留」は続日本紀にみえる）と変名され石見に流された。そしてその地で刑死（水死）した。

(c)万葉集巻一，二は人麿を中心とする，律令・藤原体制の犠牲者への鎮魂と告発であったものが後，これも体制から疎外されていった大伴氏によってまとめられ現在の万葉集に結実した。

長くなったが，以上が『十字架』『水底の歌』に於て熱っぽく語られていることである。私はこれを読んで――おおげさな表現ではなく―― 驚愕した。なにしろ聖徳太子といえば日本最初の仏教帰依者，それが実は怨霊であったとは。万葉集といえば万葉ぶり，のびやかで雄々しく，おおらかな古代人と，高等学校で習ったはずであった（私の高校時代の古文の先生は，こちこちのアララギ派歌人だった）。それが実は陰謀と呪いの世界であったとは。例えば，有馬皇子の自ら傷む歌，

岩代の浜松が枝を引き結び
ま幸くあらばまた帰りみむ

は私はいままで，単に旅行に出かける人が，ちょっと縁起をかついで出かけた時の歌だとばかり思っていた。ところが実はそうではなかった。有馬皇子は蘇我赤兄に誘われて謀反を企てたが，当の赤兄に捕われて都に護送される途中で殺された。そしてこれは中大兄（天智）の演出であったのである（ことわっておくが，これは梅原説によるものではない。万葉集の解説書にはどの本もちゃんとこう説明してある。私が無知であっただけである）。「松が枝を結ぶ」ことはちょっとした縁起などでは無く，深い呪的行為であったのである。巻二の挽歌はこの歌を筆頭として，長忌寸意吉麻呂，山上憶良，柿本人麿が次々に「浜松が枝」に和していくのである。万葉集を告発の書とみるのはここからでも不可能ではないようである。また，山部赤人の歌，

み吉野の象山の際の木末には
ここだもさわぐ鳥の声かも

なども単なる叙景歌として読んでいることはできなくなる。「ここだもさわぐ鳥の声」の中に，律令体制の犠牲者達の霊魂の生れ代わりと見，赤人はそれを鎮めるために歌をうたうのだ，とみなければならないそうである。

しかし，これ程の異説が無事であるはずがない。人麿論に対しては益田勝美と梅原 猛の熱い論争が『文学』誌上でかわされ，法隆寺の方からは実相院住職，高田良信の本が出ている。

私も『十字架』『水底の歌』を読んだ時はすごい説だと感嘆したが，それを契機に万葉集関係の本をあさっているうちに，いくつか疑問に感じるところがでてきた。たとえば"名声赫々たる宮廷詩人"が"属官として石見国のような僻地へどうして赴任などしなければならなかったのか（刑罪としか考えられない）"と梅原説は鋭く問うが，私は当時の「宮廷」がどのようなものであったかも問題であると思う。当時の貴族は，皇室，藤原氏を含めて，平安朝のような消費者的貴族ではなかったであろう。時は持統朝。斉明→白村江大敗→天智→壬申の乱→天武と，外患，内憂のあとを受け継いだ時代である。先進国から文物を輸入し，学びとるのに懸命の時代であったろう。生産者ではあり得ないとしても経営者ではあったろうと思う。私は斉明，天智，文武，持統のどの天皇にも，四・五世紀，日本中を走りまわった"大王"の残影を感じとることができる（文武帝以後はそれはできない）。このような時代の"宮廷詩人"というものはどのようなもので在り得ただろう。私は梅原説に触発されながら，この時代について書かれた本を読めば読む程，"当代随一の宮廷詩人 人麿が石見国府へ赴任する"ことも不思議には思わないようになってきた。

最も問題だと思うのは，「伝承」の取扱いである。例えば，明石人丸神社に於て，人丸明神は，

(i)水難 (ii)火難 (iii)安産 [(iv)眼病]

に効験をもつことに注意し，(ii) (iii)は単なる語呂合わせ

人麻呂 ⟶ 人丸 ⟨ 火止まる ⟶ 火難
　　⟨ 人産まる ⟶ 安産

として軽く片づけてしまうのに，(i)水難 の方は人麻呂が「刑によって水死」したことの状況証拠として採用する。私は民間伝承を主な手段とする民族学関係の本もいくつか読んでみたが，その語り口は慎重，あいまい

で容易に決断を下さない。伝承を論拠にする場合は余程慎重にしなければならないことを教えられた。(i)水難　に対しても，梅原説のように特別扱いするよりも，(ii)，(iii)と平等に

人麻呂→人丸 ↗火止まる→水→水の神→水難
　　↘人産まる

とした方がはるかに自然ではなかろうか。そしてこれが，

人麻呂→人丸→火止まる→水→水の神→人麻呂

は水の中から現われる（伝承）→人麻呂は水死（伝承）

と変化して行くのはもはや時間の問題である。

中村先生に教えていただいてから私はもう四年もこの２つの本とつきあってきた。折口信夫を読んでは『水底の歌』を読み直し，古事記をかじってはまた『十字架』を読んでみるという具合であった。個々の章，節には問題は多いと思うけれど，私がこの本の呪縛力――特に万葉集の成立論――から解放されるのはまだ何年も先のことであろう。

『外国語を読む』
―夢よいつまでも―

英語科　中　里　重　恭

「屠（ほふ）れ米英われらの敵だ」という標語のもとに，見たこともない特定外国を鬼畜の住む鬼が島と思わされていた――あの偏狭で倒錯した世界観が，敗戦という衝撃で不気味な宙返りを打って，正常に戻ったのは私が中学に入る前の年だった。いたるところ墨で塗り潰された教科書をもって，青空教室で聞きなれない「民主主義」を教わりはじめたわれらもと「少国民」の間に，早くも英語熱が高まっていた。ラジオから聞こえて来る‘Come Come おじさん’（平川唯一先生のこと）の英語をやっていて，「アイ・キャン・スピーク・イングリッシュ」などと言う者がいた。まだ学校では教えてもらえないアルファベットを全部知っていて，校庭の地面に釘で英単語を書き連ね，級友を羨しがらせる小にくらしい‘物識り’もいた。その真偽のほどがさだかならない英語を聞いたり，くねくねした綴字を眺めたりしながら，‘物識らず’同志は囁き合った。「カッコいい！」（この言葉は戦時中からあった）「英語ってきれいだね。」「牛乳とかリンゴとか言わないで，ミルクとかアップルとか言うとうまそうに聞こえる。」・・・・・・かつては鬼の言葉として軽蔑した英語を，こんなにも礼賛する救いがたい非国民にわれわれはなっていたのである。いまはやりのルーツ（roots）という言葉は，私は嫌いなのであるが，それをたどるというやり方に従えば，私の英語への接近の一つのルート（root）は，「こんな‘物識り’だけに旨い汁を吸わせてなるものぞ，ひとつ自分も」という気持ちにあったのだと思う。いまここで，私が一度自分を捕えたこの気持ちを結局捨てきれず，英文学科に入り，英語を教え，英語の本とつねに格闘する運命になったルート（route）（経路）を――ロッキード事件の如く――明白にする義務があるように思う。

中学で週五時間の英語の授業があったにもかかわらず，教科書らしい教科書がもらえたのは二年の二学期で，‘Let's Learn English’というのだった。最近のいわゆる実用を旨とする教科書と違って，この本の第二巻は，有名な物語をやさしくしたものばかりだった。覚えているのは，ロビンソン・クルーソー，ガリバー旅行記，アリババと四十人の盗賊，二つのローソク（アンデルセン）などで，この本は体系的に，段階的に英語を教える配慮に欠けていたとはいえ，若い心に異国，異文化への関心と憧憬をそそるのには打ってつけだった。「名も知らぬ遠き島より・・・・」ではないがはるばる八重の潮路をこえた異郷に思いを馳せる感情は本源的に人の魂に付随しているのだと思う。ついでながら，いかに有効に英語を教えるかに苦慮されているかたがたの努力を尊いと思う一方，私は憧れさえ育てれば，学びたい者はどんな方法によっても英語を修得するものだという考えに賛成である。

あの教科書に刺激されて，中学・高校にかけて，私は日本語訳で，宝島，ジキル博士とハイド氏，小公子，シャーロック・ホームズの冒険，クリスマス・カロル，二都物語（以上イギリス），青春彷徨（ペーター・カーメンチンド），シッダルタ，みずうみ，若きヴェルテルの悩み（以上ドイツ），罪と罰，貧しき人々，復活，幼年時代（以上ロシヤ），椿姫，ジャン・クリストフ，チボー家の人々（以上フランス）などの外国文学に触れた。そして，論理的思考が未熟で，頭の回転の遅い私が，英文法や英作文が苦手で，英語の成績が悪かったのにもかかわらず，すくなくとも英語の原作は，いつかこの翻訳を読むようにすらすらと英語で読んでみたいという，ひそかな，遠大な望みを持った。

高校三年生になっても受験勉強が嫌いであまりやらなかった私は，日曜日になると，隣町の本屋の多い鎌倉まで海づたいに歩いて行って，本を漁った。ある日偶然に洋書ばかりが店内の書架を埋めつくしているK書房という本屋を見つけた。英国の詩人キーツはある

名著との出会いを，「新しい星座が突如視界に入った天体観測者のよろこび」また中南米を征服した「コルテスが'鋭い鷲の目'ではじめて見る太平洋を凝視している様子」にたとえた。それほど大げさではないにしても，高校生の私にとって，この店の発見はすくなくとも桃源境をさぐりあてた幸運のように感じられた。家庭的な雰囲気のするエブリマンズ・ライブラリー，小さいが堅牢で学都の香り高いオクスフォード・クラシックス，岩波文庫が範としたという，いかにもドイツ的合理主義の粋という感じのレクラム文庫など，心をときめかせる洋書のシリーズの中で，ひときわ私の心をとらえたのはペンギン・ブックスだった。当時の表紙は単純な三段刷りで，中央の白抜きに書名・作者名が書かれ，上下が同色でペンギンの腹が白く浮き出ていた。小説はオレンジ色，冒険紀行は濃桃色，劇は赤，探偵小説は緑だった。南極の氷山を思わせるエキゾティックな装釘は何たる魅力だろう！こんな本を自分の書棚に並べて，日本語を読むように自由に読めたら！自分の英語力の乏しさもかえりみず，私はこの書店で，アンソン提督の世界一周記，スタンレー，リヴィングストンほかのアフリカ探検記，ドイルのシャーロック・ホームズの回顧録，ディケンズの二都物語，エミリー・ブロンテの嵐ケ丘など小遣いをためては買いこみ，辞書を片手に，時には翻訳を見ながら，苦労して読んで行った。初心者が最高級のスキー用具で身仕度して，転びながら滑るようなものだった。そのK書房は残念なことに二年ほどで店じまいになってしまった。多分洋書だけの販売という理想主義は現実に通用しなかったのであろう。が，若い心にこれだけの夢をもたせてくれたこの店の企画者に感謝を捧げたい。

生まれてはじめて洋書を開き，その香りをかぎ，本場の英国の活字を見たよろこびについては，いまさら書くまでもない。もともと他人と対面して話をすることの嫌いな私が，英語をうまく話せるはずがないと決めていたので，英米人とのコミュニケーションのために英語を学ぼうなどとは思いもしなかったが，ただ英語の本を読みたいばかりに英文学科を選んでしまった。この決定のために私はほかに何と多くのものを犠牲にしてしまったことか！　結局は私はおろかな憑かれた人間である。が，どんなに血のめぐりの悪い者にでも一つのことを長年連続してやっていると，何らかの功徳が現れるものだ。英語の本を読む時，一つの文の意味がわからなくて，同じ文の上に行ったり来たり何度も目を動かさなければならなかったのが，次第に一直線に左から右へと読み進んで行けるようになってきた。やさしい小説や解説文ならば，がんばれば一日50～100ページは行くようになった（理解の度合いはあやしいものだが）。しかし私のスピードでは英語を母国語とする読書家のはやさの十分の一にもならないようである。これでは一生かかっても英文学者になれないのであるが，英語の本を読むよろこびだけは，きっと墓場まで持ち込むであろうと思われる。それにしてもワーズワースの「子供はおとなの父である」という句は何という真実性を持っていることだろう。人間は子供時代の憧れと夢を一生追いつづけ，一日一日と虚飾を捨てて行き，純粋さを増しながら理想に近づいて行くものだ。私には道徳家が規定する徳目がうるさいと思われる場合が多いのであるが，「人格の完成」とは，もしやこんな「理想への限りない接近」を指すのではないかと考えることがある。

日本で言えば「古き天地閉(もめつちとざ)せる霧を大御光にくまなく払ひ」という明治時代にかぎりなく憧れるように，英国が七つの海を支配したヴィクトリア時代は，私の懐古的憧憬の的である。「質より量」というたくましさを持ったヴィクトリア時代の作家たちは実に長い小説を書いたものである。私はディケンズを手はじめとして，一冊500～1,000ページもあるいろいろな小説家の作品をひとつずつ崩して行って，繁栄の光と滅亡のかげがあやしく入り混るヴィクトリア時代の英国のイメージを目のあたりに浮かばせたいと願う。こんな無謀な計画にだれも助けてくれなくともよいのである。

シッダルタを訳したドイツ文学の手塚富雄先生は「翻訳者とは名曲をひくヴァイオリニストのようなものだ」という意味のことを言われた。いかによい名訳家の「演奏」をきいても原作のほんとうの味はわからないということを，私の小さな経験からも十分に悟った。ここで私は自分をかって感動させた英文学以外の名作も原語で読んでみたいという，新たな無謀な計画をいだくのである。とはいえ大学の時に習った第二外国語のドイツ語も結局ものにならなかった。にもかかわらず私は，トニオ・クレーゲル，車輪の下，シッダルタ，若きヴェルテルの悩み，ゲーテ詩集などを時どきカバンの底にひそめていて，思い出したようにとり出して，ドイツ語の辞書をひいては原作のにおいをかいでいる。しかし悲しいかな！一ページ読むのに一時間もかかる始末だから，この数冊が読み終らないうちに，私の人生のたそがれが来てしまうであろう。ひたすら「撃(うち)てし止まむ」と念じているのであるが・・・・。

私の読書

機械工学科　渡　辺　敏　夫

読書の仕方にはいろいろある。興味をそそる本を，順に読んでゆく読み方。1人の作家の作品を，ずっと通して読んでゆく読み方。自分の思う1つのテーマに参考となる本を，通して読む読み方。と，だいたいこの様な風に分けられる。私が読書をする，あるいはしてきた方法も，このように分けられる。私の経験をふり返ってみると，年代を経るにつれて，読み方が変化してきた。それでは，諸君たちの年代のころの，私の読書について紹介してみよう。

15～18才頃は，手当り次第に読んでいた。まだこの頃は，自我の覚醒もそれほど進んではいなく，深刻な悩みもまだなかった。おもしろい本が見つかると一生懸命読む，読み終ったら次に読む本を探して読む，とこういった風にくり返していた。この頃は外国文学作品にこっていて，邦人作品ははんの数えるほどしか読まなかった。特に高校1年の夏休みに読んだドストエフスキーの「罪と罰」の鮮烈な読後感が今でも思い出される。他には「赤と黒」「静かなるドン」といった作品を読んだことを覚えている。

これらの本を読むきっかけは，雑誌付録に入っていた1冊の文学作品リストで，そこには内容がダイジェストされているから，だいたいの様子がわかって，かなり重宝したことを覚えている。

19～21才位の間は，自分で興味のある作家を探し出して，1人の作家の作品を通して読んだ。このころになると，本は自分で本屋へ行き買い求めて，読むようになった。この年代は人生のうちで最も多感な時期である。私もそういった時期で，自分の生き方を，真摯に考え，悩み，何らかの指標を見つけたかった。そうして読んで行くうちに，倉田百三を見つけた。諸君たちも彼の作品を読んだことがあると思う。「愛と認識の出発」「青春の息の痕」「超克」「出家とその弟子」等。そういった時期に私も一人前に恋をした。そのために自分の恋愛論・人生論が必要であった。そして自分に納得の行く考えを模索していた。その私の考えを代弁してくれるような本が「愛と認識の出発」であり「青春の息の痕」であった。これにより，ますます私の考えはこれらの作品に影響されつゝできあがって行った。この他にも興味のある本を合い間にいろいろ読んでみた。そうした訳で今度は，人間倉田百三を知りたくなった。どうしてこうした作品を書くに至ったのか，知りたかった。こうして彼の作品，評論を読んでいった。　が，結局私の期待を満足する人間像ではなかったが，私の考えを得た，というより考えの手助けをしてくれた，一連の作品のことは，今でも記憶に残り，読み返してみると昔の思い出がよみ返ってくる。

同じ時期でドストエフスキーの作品を通して読んだ。読むきっかけは，前にも書いたが，高校時代に読んだ「罪と罰」の影響と，大学の講義でドストエフスキーのことを聞いたことであった。ドストエフスキーを読んで行くと，彼の影響を受けた日本の作家の名が上がってきた。こうして，埴谷雄高・椎名麟三・高橋和己武田泰淳・野間宏の作品を読むきっかけとなった。この中で，椎名麟三・高橋和己はよく読んだ。これらの作品を読むたびに，私の気持は共鳴をおこし，高鳴った。ちょうど20～21才の時であったと思う。この中で高橋和己の「邪宗門」は，一番の傑作だと思っている。これらの作家たちは，ちょうどこの時期に相次いで亡くなった。今後の作品を期待しながら読んでいた私にはショックだったことを覚えている。その後，興味をそそる作家が見つからなかったために，こういった読み方はここで終りになった。

こうして22才ころから，フィクションは以前に比べて余り読まなくなった。それに変わって歴史の本を読み出した。歴史の中でも日本の聖徳太子のころから大化の改新・壬申の乱・奈良時代を経て平安遷都までの日本の古代に興味がわいてきた。岩波新書にこれらの時代について扱った本が何冊か出されている。「大化の改新」「萬葉の時代」「天武天皇」「奈良」等，これらの作品を読みながら，史実も読んだ。そして，上原和「斑鳩の白い道のうえに」を読み，りりしい馬上の聖徳太子が，あの法隆寺の甍を背にして飛鳥の宮までを疾駆する姿を想像し，ますますこれらの時代をくわしく知りたくなった。持統・天智・天武・その他悲運をたどった諸皇子等，話題にのぼる人物もことかかない。又，飛鳥・奈良を旅行して，実際の建物，景色をこの目で確かめ，より読書にも熱が入った。こういった風に私の読書は進んで行った。

以上私の読書について色々挙げたが，本の読み方にもいろいろあり，それぞれに合った読み方があると思う。しかしなんといっても，おもしろい本を読むことだ。学校や本で良書として挙げてある著名本を，ためになるといって読んでも，読書では"良薬口に苦し"とはいかない。本人がおもしろく感じなければ何の効果もない。しばらくしたら，それをすっかり忘れてし

まうだろう。だが何もしないでいては，おもしろい本は自分の前には現われてはこない。自分で考え何かを欲求していれば，自然にそれらは目の中に入ってくる。読書により架空の経験もできるし，他人の考えも知ることができるから，より確かな考えを持つことができるだろう。各人各様の読み方でいい。とにかく，後で思い出せる本のあることが，最良の読書だと思っている。

「本を読むこと雑感」

工業化学科　大　隈　信　行

読書には小説や随筆のように教養的な意味も含まれるが，娯楽的要素の強いものと仕事上どちらかと言えばやむを得ずに読まざるを得ない専門書や文献・文書の類があります。技術者，研究者などの専門職の人にとって後者の読解力は間違いなく重要な能力の一つであると言えます。現在学生である諸君もやがて到来する高齢化社会の主役として我々の世代以上に長く第一線で働くことを余儀無くされ、その上に生涯教育というお膳をあてがわれてこの種の読書を強いられるのではないかと同情しています。そうなるとこれからの通常の学校教育――若い人間が社会に出る前に受けるという意味の教育――の目的は専門的知識を身につけることよりも学習できる能力を身につける，あるいは学習する方法を学習することにその重点が移って行くような気がします。

読書の好き嫌いは多分に体質的なもので――必ずしも学業成績とは比例しない――一般の人にとって勉強であることが，ある人にとっては娯楽とは言えないまでも趣味，もしくは楽しみであることも少なくないようです。高専の学生と本屋で会うことは少なく，本を読むことはあまり好きではないのかなと思うことがありますが，これはむしろ授業と実験とレポートに追われているのが原因かもしれません。

私は数式の入っていない本と横文字で書かれた本以外は嫌いでなく，小学生の頃から学校の図書室に入浸り，家では大人の本を引っぱり出してきてよく叱られたものです。今も本を読み始めると夢中になって他の事が耳に入らなくなり家でよく文句を言われています。ただし専門書となりますと話は別で大袈裟に構える必要があり，仕事以外の何物でもなくなってしまいます。こうなると「読書」という言葉のニュアンスよりは「本を読む作業」と表現したほうがピッタリくるような気がします。このような意味の読書を含めてこれまでに本を読むことについて感じたことを二，三述べてみたいと思います。

「基本書について」　何かの雑誌で読みましたが，文筆家を志す人は優れた一人の作家の文章を徹底的に吸収することが文章上達のうえで極めて有効な方法であるそうです。また国際的に著名な指揮者が何かの対談で音楽学校の学生時代に先生から指揮のエッセンスをすべて含むといわれるある一つの曲の指揮を嫌になるほど叩きこまれ，それが今日の自分をあらしめた財産であり，現在はただその財産を食潰しているにすぎないというような意味を述べていたのが印象に残っています。このことは工学の場合にも当てはまるのではないかと思います。すなわち自分の専門にしようとする分野の名著といわれる基礎的な参考書を一冊精読し完璧なまでに頭に叩きこむことが実際にその分野のエキスパートになる基本的条件の一つであるような気がします。

かくいう私は残念ながらこれが出来なかったことを今つくづく後悔しております。手遅れの感はありますがこれから始めようと決心したところです。

「面白い本について」　だんだん齢をとると面白い本に出喰さないような気がします。若い頃に味わった読後の興奮や感激が滅多に得られなくなり，ただ単に字面を追うような読書が多くなったことに気付きます。この原因は自分自身の読書に対する嗜好の硬直化にあるようです。年令を重ねるにつれて知らず知らずのうちに同じような本ばかりを選んで読んでいるのが最も大きな原因だと思います。こういう場合は他人の書棚の本を手に取ってみるのも一つの方法です。

「自分の専門以外の専門書を読むことについて」

工学という学問は企業もしくは社会にとってあくまでも生活を営むための一つの手段にしかすぎません。ところが専門家は往々にしてそれ自体が目的となりがちです。これまでの工学者は功利性という一つの狭い目的のみを追求すれば事足りたのですが，最近になってようやくそれが目的である功利性以外の様々な影響をまわりに及ぼすことに気付き始めたわけです。工学というものは本質的に社会と密接にかかわりあっています。もっと卑近な例をあげれば学生諸君が企業に勤めるようになれば労働，賃金，安全，組合，コスト，特許，景気などの問題に毎日かかわりあって働くことになります。技術者が社会科学に関する知識，素養をもつことはこれからは当り前のことになると思います。

暇ができたならば社会，経済，法律などの本を少しずつでも良いからまとまって読まれることをお勧めします。

私はまったくの気まぐれから法律の本を少しかじり本業のほうを少々疎かにしたことがありますが，企業において開発の仕事に従事した際にこの法律的なものの考え方が案外と役に立ったような気がします。例えば開発の途中で何かトラブルが発生した場合，その現象を整理して問題点を明確にし，基本的原則に照して当事者同士の調和点をみつけていく作業は，法律の事例解釈の演習と相通ずるところがあるように思われます。

「時々読みかえす本」 最近は特に読みっぱなしのままであることがほとんどです――あまり感心したことではありません――が開発の仕事を担当したときは，クラウゼヴィッツの「戦争論」を折りにふれ読みかえしました。戦争はそれにたずさわる人間が全智全能をかたむけた闘争であり，それを支配する法則は極めて多くの真実を含み，研究や開発のような困難な状況に追い込まれる仕事についた場合は非常に得るところが多いと言えます。

「終りに」 読書は人間の活動においてあくまで二次的なものであり，本を読むことによって即問題が解決したり――最も初歩的なことは別として――能力が向上したり賢くなったりすることはほとんどありえません。ただ何かを意欲し，思考する人間にはその進むべき方向を指してくれることはあり得ると思います。

最後に実践的を目標とする高専生へ前述の「戦争論」より二，三抜き書きしておきます。

「理論は観察たるべきであって，教義たるべきではない」「知識は能力とならねばならぬ――用兵上の知識（ここでは方法論とでも読みかえて）は完全に精神のなかに同化されねばならず，客観的な存在は許されない」「知識はその活動の究極の目的を達するに先立ち単純化されねばならない。

****

新着図書目録

✣印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総　記

福島民報縮刷版　昭和53年6月～8月号　福島民報社✣
朝日新聞縮刷版　昭和53年7・8月号　朝日新聞社✣
新福島風土記　創土社
M.アドラー
本を読む人　ブリタニカ出版✣
福島県議会史昭和編　第7巻　100年　福島県議会
斎藤伊知郎
近代いわき経済史考　いわき短大
林三郎　新聞とは何か　PHP
中国古典新書
静古堂剪燈　明徳出版
東洋文庫
336　中国民衆判乱史1　平凡社✣
337　懐堂日譜4　同✣
338　甲子夜話5　同✣
339　アラビアンナイト9　同✣
人類の知的遺産
5　老子　荘子　講談社✣
51　ドストエフスキー　同✣
54　ニーチェ　同✣
56　フロイト　同✣
68　アインシュタイン　同✣
74　トインビー　同✣
76　毛沢東　同✣

哲　学

陽明学大系
5　陽明門　下（上）　明徳出版✣
6　同　下（中）　同✣
世界の思想家
7　デカルト　平凡社✣
10　アダムスミス　同✣
13　ブルーノ　同✣
17　ニーチェ　同✣
19　フッサール　同✣
20　デューイ　同✣
日本仏教基礎講座
7　日蓮宗　雄山閣✣
山田晶　トマス，アクイナスの「エッセ」研究　創文社
マルティン，ルター
生と死について　同
金岡秀友
日本の神秘思想　玉川大学出版部
相良亨　本居宣長　東京大学出版会

歴　史

P.ミルワード
トマス，モアとその時代　研究社出版
飯内芳彦
現代地理学シリーズ　島―その社会地理―　朝倉書店
藤岡謙二郎
地図にみる世界の百万都市　同
石川梯次郎
増本量伝　誠文堂新光社
綱野善彦
無縁　公界　楽　平凡社
福永光司
道教と古代の天皇制　徳間書店
中山茂　野口英世　朝日新聞社
日本史用語大辞典　用語編　柏書房
同　参考資料編　検索編　同
世界地理
4　南アジア　朝倉書店
14　ラテンアメリカ1　同
16　日本1　同
17　同　2　同
日本の山河
36　天と地の旅　千葉　図書刊行会✣
37　同　埼玉　同✣
明治大正図誌
1　東京一　筑摩書房✣
4　横浜　神戸　同✣
5　北海道　同✣
6　東北　同✣
9　東海道　同✣
10　京都　同✣
11　大阪　同✣
15　九州　同✣

社会科学

時差は全なり　サイマル出版会
公安百年史　暴力追放の足跡　公安問題研究協会
理科実験の安全な指導　東洋館出版
安全な理科実験　同
長谷川秀吉
小学校中学校理科　薬品と管理取り扱いハンドブック　同
金子淳一
思考力創造力を育てる新しい理科の記録指導　同

大槻誠悉
理科教具の開発と自作　同
永井道雄
これからの教育を考える　国土社
松下幸之助
政治を見直そう　PHP研究所
日本はよみがえるか　同
実践経営哲学　同
阿部静也
中世を旅する人々　平凡社
山口昌男
知の遠近法　岩波書店
知の祝祭　青土社
溪作光直
日本人の笑い　玉川大学出版部
土田坂之助
聖トマス経済学　臨川書店
公文俊平
社会システム論　日本経済新聞社
NHKブックス
322　現代青年の意識と行動　日本放送出版協会
日本民俗文化大系
4　南方熊楠　講談社
7　早川孝太郎　今和次郎　同
12　伊波普猷　金田一京助　同
野生児の記録
1　狼に育てられた子　福村出版
2　野生児の世界　同
3　カスパーハウザー　同
5　野生児　同
6　野生児と自閉症児　同

自然科学

昭和40年式二万五千分1 地図図式規定　日本測量協会
アイザック・トドハンター
確率論史　現代数学社
亀谷哲治
有機合成化学II　南江堂
野口宏　カタストロフィーの理論　講談社
中井喜和
代数幾何学　共立出版
秋月康夫
射影幾何学　同
古郡実　非線形問題　同
工藤弘吉
数理統計学　同
丸山慎四郎
確率論　同
吉田耕作
超函数論　同
坂島勇三
リー環論　同
鵜山国男
現場技術者のためのやさしい地質学　築地書館
鈴木通夫
群論　上　下　岩波書店
山田雅信
わかる流体の力学　日新出版
加須屋実
環境毒性学複合汚染の恐怖　上　下　日刊工業
林知己夫
計量感覚　プレジデント社
沼田真　図説 日本の植生　朝倉書店
西山邦彦編
人間の尊厳と科学　勁草書房
W.F.エイムズ
工学における非線形偏微分方程式 1　下　産業図書
KBGK物理展開編　朝倉書店
寺澤寛一
自然科学者のための数学概論　岩波書店
竹内均　日本列島地学散歩　九州　四国編　平凡社
同　近畿　中国編　同
同　関東　中部編　同
われらの地球　同
日本化学会編
科学実験の安全指針　丸善
井本稔　日本の化学　化学同人
坪井忠二
振動論　現代工学社
ブルーバックス
319　新しい科学史の見方　講談社
357　化石からさぐる日本列島の歴史　同
359　近代物理の発想 1　同
360　新しい宇宙観　同
物理工学実験
7　低温技術　東京大学出版会
8　高熱　熱技術　同
9　放射線計測技術　同
岩波講座基礎数学
20　保型関数 II　岩波書店
基礎物理選書
17　量子力学演習　裳華房
機械工学大系
8　流れの力学　コロナ社
理工学基礎講座
16　流体力学　朝倉書店
NHKブックス
321　セルフコントロールの医学　日本放送出版協会
323　災害情報を考える　同
324　地球の回転　同
Einar Hille
Functional Analysis and Semi Groups　American Mathematical Society
Keith Kendig
Elementary Algebraic Geometry　Springer-Verlag
Philippe G. Ciarlet
The Finite Element Method for Elliptic Problems　North-Holland
Marc Duro
Discrete and Switching Functions　Mc Graw-Hill
S.S.Abhyankar
Lectures on Expansion Techniques in Algebraic Geometry　Tata Institute
B.Davies
Integral Transforms and Their Applications　Springer-Verlag

工学・技術

花王石鹸五十年史　花王石鹸
トヨタのあゆみ　トヨタ自動車工業
わ　わざ　わだち　同
わたしとくるま　同
道路橋示方書　同解説　日本道路協会
鋼道路橋施工便覧　同
クロソイドポケットブック　同
昭和53年度電子通信部門全国大会講演論文集　電子通信学会
昭和53年度電子通信学会電波部門全国大会講演論文集　同
機械辞典　技報堂
JIS用語辞典　機械金属編　日本規格協会
昭和52年版　公害白書　福島県生活環境部公害規制課
株式会社熊谷組四十年史　熊谷組
金沢工業大学創立20年記念論文集　金沢工業大学
界面活性剤一覧表　日本界面活性剤工業会
日本大学工学部三十周年記念論文集　日本大学工学部
産業機械工業30年史　日本産業機械工業会
耐風耐震構造専門部会 第9回合同部会会講録　建設省土木研究所
昭和53年四学会連合大会講演論文集　電気学会
東芝集積回路データブック（リニア編）　コーヨーエンタープライズ
現行土木小六法　昭和53年版　現代理工学
スペース.ストラクチャーの解析　鹿島出版会
飯島靖一
土木建設方支記　技報堂出版
土木業の歩みと心とかたち　同
土木に生きる、まだ楽しからずや　同
川本眺万
地盤工学における有限要素解析　培風館
出本三三三
材料科学のための物体の変形学　誠文堂新光社
R.H.ギャラガー
有限要素解析の基礎　丸善
川井忠彦
キャラガー有限要素解析問題と解答　同
比企能夫
弾性　非弾性　共立出版
L.M.カチャノフ
破壊力学の基礎　森北出版
黒木朝司郎
金属の強度と破壊　同
横堀武夫
材料強度学　岩波書店
東京電機大学編
最新電気用機械工学大意　電機大出版局
戸川隼人
FORTRANによる有限要素法入門　サイエンス社
E.C.ペステル
マトリクス弾性力学　ブレイン図書
J.G.ウィリアムズ
高分子固体の応力解析とその応用　培風館
S.H.Crandall
機械技術者のためのランダム振動　コロナ社
JISハンドブック機械要素　1978　日本規格協会

同　鉄鋼　同
同　製図　同
山本敏男
機械力学　朝倉書店
人見勝人
生産システム工学　共立出版
Paul Gordon
平衡状態図の基礎　丸善
山口降章
改訂石油製品の知識　幸書房
廣田友義
真空管回路　修教社
B.ナス　マトリックス有限要素法　ブレイン図書
丸安隆和
新版測量力　上　下　コロナ社
木内慶　道路測量（Ⅱ）設置計算　山海堂
高橋忠敬
土地区画整理測量の実際　同
山本氏寿
改訂増補写真測量の実務　同
桜井盛男
実用版土木製図の解説　現代理工学
実用土木工事の設計歩掛と見積　同
河村協編
改正土木工事標準仕様書解説　同
山崎俊雄
科学技術史概論　オーム社
千葉喜球夫
道路測量の手法　山海堂
日本太陽エネルギー学会編
太陽エネルギー読本　オーム社
堀山亨　図解合金状態図読本　同
ハンディブック機械　同
安田南三郎
機械技術者のための電動機読本　産報
Hunter Rouse
ラウス流体工学　工学図書
仲島正之
初学者のための水力学と流体機械　理工学社
吉田成康
改訂金属物理学序論　コロナ社
図解エネルギー用語辞典　日刊工業
古濱庄一
内燃機関　森北出版
一色尚次
新蒸気動力工学　同
L.ナシェルスキー
電子計算機の基礎（2冊）　培風館
佐藤義信
演習アセンブラ（3冊）　オーム社
大泉元郎
電子計算機Ⅱ（3冊）　朝倉書房
電子工学ポケットブック　第3版　オーム社
大河内治
新編電験第三種演算講義1～7　同
河村博　照明　電熱　電気化学　同
森澤一栄
電動機応用自動制御　同
高田勇次郎
電気機器Ⅰ.Ⅱ　同
長倉寛　発電変電　同
池田市寿
送電配電　同
木下隆博
電気物理電気回路Ⅰ.Ⅱ　同
角田秀夫
リニア集積基礎回路　東京電気大学出版局
片山功蔵
伝熱工学演習　産業図書
F.A.ホランド
伝熱工学　基礎編　応用編　培風館
内田秀雄編
大学演習　伝熱工学　裳華房
益山正人
新版火力発電　東京電気大学出版局
中川徹　科学者技術者のためのフォートラン入門　東京化学同人
小林芳正
建設における地盤振動の影響と防止　鹿島出版
飯田隆一
土木工学における岩盤力学概説　彰国社
岩津巌　地盤の調査判定と活用　鹿島出版会
成岡昌夫
構造力学Ⅱ　丸善
最新初級電験講座
1　基礎数学　電気書院
2　電気理論　同
3　電気計測　同
4　発変電所　同
5　送配電線　同
6　機器材料　同
7　電力応用　同
8　電気法規　同
9　交流計算　同
高尾利治
電気計測　オーム社
東京電機大学編
10ケ年電験全問題と標準解答の研究
昭和41～50年　東京電気大学出版局
電験第2種計算演習シリーズ
1　電気理論回路の計算演習　電気書院
2　電気理論電気測定の計算演習　同
3　発変電所の計算演習　同
4　送電線施設管理および法規の計算演習　同
5　電気機械の計算演習　同
6　電力応用の計算演習　同
3種電験教室
1　電気理論計測　電気大出版局
2　発変電所　同
3　送電配電　同
4　電気機器材料　同
5　電気応用　同
7　電気用数学の学び方　同
電験第2種入門講座
1　基礎数学　オーム社
2　物理化学　同
4　交流回路　同
5　電子工学自動制御　同
C.Lester Hogan
集積回路の解析と設計　近代科学社
横井久義
集積回路工学　コロナ社
IC応用ハンドブック　昭晃堂
横井孝次郎
マイクロコンピュータ活用マニュアル　ラジオ技術社
同　基礎技術マニュアル　同
COMSディジタル回路マニュアル　同
ディジタルIC実用回路マニュアル　同
リニアIC実用回路マニュアル　同
伊田昭一
改訂集積回路技術　工業調査会
入門ICセミナー　CQ出版社
定電圧ICとその使い方　産報出版
渡部弘之
コンピュータ設計技術1.2　CQ出版社
猪飼国夫
ディジタルシステムの設計　同
長橋芳行
DCアンプの設計　同
岡村迪夫
解析ディジタル回路　同
OPアンプ回路の設計　同
角田秀夫
オペアンプの基本と応用　東京電気大学出版局
リニアICの応用設計実例　理工研究社
最新演算増幅IC応用回路集積資料　同
サイリスタの応用　上　下　丸善
サイリスタ装置　同
同　回路　同
同　素子　同
山崎峰次郎
香辛料Ⅳ　エスビー食品
繊維学会編
繊維便覧加工編　丸善
日本地球化学会編
水汚染の機構と解析　産業図書
土木用語辞典　コロナ社
土木学会編
土木工学における数値解析　基礎編　サイエンス社
NHKブックス
鍋ひとすじの青春　日本放送出版協会
土木施工法講座
7　基礎の施工法　山海堂
新しい機械工学
2　新蒸気動力工学　森北出版
土木施工講座
3　鋼橋上部構造施工法　山海堂
10　ダム施工法　同
23　鉄筋コンクリート施工法　同
25　実用土木材料　同
John J.Norwich
Spirit of the Age <イギリスの建築と文化>　鶴見書店
Fast Fracture and Crack Arrest　A.S.T.M
Communication Engineering　Mc Graw-Hill
Theory of Thermionic Vacum Tubes　同
Eugene J.Hall
The Language of Electrical and Electronic Engineering in English　Regents
The Language of Mechanical Engineering in English　同
Anita K.Jones
Perspectiues on Computer Suience　Academic Press
Second International Conference on Mechanical Behavior of Materials　I.C.M
Jony Dudley-Euans
Nucleus Engineering　Longman

産　業

衛星通信年報　昭和51年度
国際電信電話（KK）
国際電信電話年報　昭和51年度　同
国際電気通信関係略語集　同
KDD創業25周年記念論文集 第1部　同

上性清方
土地家屋調査士のための数学作図　山海堂
同　測量問題　同

中川徳郎
同　測量作図　同

河野功　同　受験測量　同

芸　術

A.V.ミッチェル
キャンプカウンセリング
ベスボールマガジン社

佐藤友久
スポーツの基礎的トレーニング
大修館書店

福田雅之助
図説テニス事典　講談社
体操競技写真大鑑　日本スワロー

吾妻兼治郎
マリノマリーニ　現代彫刻センター
旭硝子工業技術奨励会研究報告
Vol 30 1977　Vol 31 1977　旭硝子(KK)

大和古寺大観
7　浄住山寺　岩船寺　浄瑠璃寺
岩波書店

古寺巡礼京都
19　知恩院　淡交社
20　金閣寺　銀閣寺　同

日本絵巻大成
14　蒙古襲来絵詞　中央公論社
20　なよ竹物語絵詞　道綱母文絵巻　同

特活シリーズ
1　図解水泳の教室　北隆館
9　キャンプとハイキングの教室　同
19　スキーの教室　同
20　バレーボールの教室　同
21　陸上競技の教室　同
24　体操の教室　同
25　ダンスの教室　同
29　剣道の教室　同
30　柔道の教室　同

新修日本絵巻物全集
26　天子摂関御影　公家列影図　中殿御会
図　随身庭騎絵巻　角川書店

語　学

山田碧美
裏宇の語源　角川書店

高部義信
アメリカ新語辞典　研究社

金田一春彦編
学研国語大辞典　学習研究社

高田宏　言葉の海へ　新潮社

岩淵悦太郎
日本語対談　筑摩書房

時枝誠記
言語生活論　岩波書店
文法文章論　同

田中克彦
言語からみた民族と国家　同

新釈漢文大系
78　世説新語　明治書院

A.M.Macdonald
Chambers Twentieth Chentury
Dictionary　Chambers

文　学

福田清文編
東京文学地名辞典　東京堂出版

アンドレモーロワ
私の生活技術　講談社

加藤東郎
遠谷住来　花神社
上林暁全集 14　筑摩書房
露伴全集 1～12　岩波書店
私撰集伝本書目　明治書院
俳句歳時記　平凡社

横田正吉
絢爛たる暗号　集英社

豊田穣　急流の孤舟　講談社

百目鬼恭三
奇談の時代　朝日新聞社

尾形仂　松尾芭蕉（日本を創った人びと）　平凡社

吉野俊彦
あきらめの哲学　森鷗外　P.HP

藤堂明保
西域紀行　日本経済新聞社

千葉宣男
木曽路「夜明け前」覚え書　三一書房

秦恒平　手さぐり日本　玉川大学出版部

E.カッシラー
理念と形姿　三修社

シェイクスピア
リア王年代記　北星堂書店

川崎寿彦
観のマニエリスム　研究社

上田敏全集
1　海潮音　牧羊神　洛遺篇
教育出版センター
5　定本上田敏全集　同

中国の名詩鑑賞
5　盛唐　明治書院
8　宋詩附金　平凡社

世界の文学
5　レオーノフ　集英社
38　現代評論集　同

近代文学評論大系
3　明治期 III　角川書店
4　大正期 I　同

Pat Rogers
Defoe The Critical Heritage　R.K.P
Philip Collins
Dickens The Critical Heritage
Editedby Philip Collins
Barnes & Noble